

令和7年度

# 赤羽根の里だより

茅ヶ崎市立赤羽根中学校 学校便り 令和8年3月5日(木)  
校長 高橋 励



Dear Student(\*^\_^\*)

## 背中せなかでかた語れるそつぎようしき卒業式を

～卒業まで1週間を切りました～

今日の卒業式予行、お疲れさまでした。

コロナ禍以前は、在校生全員が当日の式に

参列し卒業生の門出を見送っていましたが、「三密の回避(すでに懐かしい言葉になりつつありま

すね)」という観点から在校生の参列は代表生徒のみ。ギューギュー詰めだった会場の席もゆとり

のある配置になりました。あのコロナ禍を境に、今は予行が全校生徒でのお別れの時間です。

実は3年生との面接、まだ続いています。一人

ひとりと話をさせてもらおうと、中学生は、3年間の中学校生活の折々のなかで、達成でも失敗でも

いろいろな経験を糧にしながら、自分の役割に気付いて成長し

ていることに気付

かされます。1,2

年生もこれから先、

今の3年生のいる

ステージに上がる

んですね。

さて、「背中せなかでかた語る」という言い回しがあります。

旅立っていく後ろ姿に、その人が為してきたことが重なって浮かび上がる、そんな表現です。

よい卒業式って、おそらく一人ひとりの背中での語りがあふれだすような式なのだと思います。

11日の卒業式で「よい卒業式でした」と参列された方々から言っていただけのような、最後の後ろ姿、見せてください。



～保護者・地域の皆さまへ～

## 発表はっぴようから何なにをまな学びましたか?

～SDGs発表会～

3月2日(月)5校時に3年生代表が探究成果を発表してくれました(今回は教頭先生にレポートしてもらいました)。

初めに3年生の司会者から「あたたかな聴き方」についての確認からスタートした報告会、3年生の代表者6名による発表でした。

選出された6名の探究テーマは、「2. 飢餓をゼロに」「5. ジェンダー平等を実現しよう」「6. 安全な水とトイレを世界中に」「7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「10. 人や国の不平等をなくそう」「13. 気候変動に具体的な対策を」です。

発表は、問題提起からはじまり、自分なりの仮説を立て、それが正しいのかインターネットの情報や、書籍、実店舗に行つての調査、自分の家の水道使用量や発電量を調査するなど、様々なアプローチから検証し、考察を行って行っていました。

そして、自分なりの結論に至るまでスムーズに論点を整理していました。また、我々赤中生にできることを提言としてまとめる発表もありました。

どの発表も、自分からは遠いところで起きているイメージがあったが、論点を整理し一気に自分の身の回りでも起きていることでもあり、一人ひとりの意識を変えることが大切であると結論付ける素晴らしい発表ばかりでした。

\*\*\*\*\*  
裏面に、2月19日号で紹介した福永結月さんの受賞作品を掲載します。

「ひとつの折り鶴には小さいかもしれない、たくさん鶴が集まれば、平和を作っていく大きな力になるのではないのでしょうか。」アオギリの語り部と呼ばれた沼田鈴子さんの言葉、世界中の子どもたちへ戦争のない暮らしをと望んだ彼女に今どんな言葉をかければいいのか。修学旅行から帰宅して体はとても疲れていたのに頭が興奮しているのかなかなか寝付けなかった。友人と過ごした楽しい時間も思い出になった。でもそれ以上に原爆が残していった大きな苦しみを受け止めきれているか不安にもなった。私の心臓はドキドキが止まらなかった。その鼓動を少しでも抑えようと、平和記念公園で見かけたアオギリの物語を急いで図書館のサイトで予約した。その本は違った視点から物事を見る大切さを教えてくれ、私を後押ししてくれる一冊になった。

原爆で左足を切断し絶望の淵にたった鈴子さんは焼け焦げたアオギリから新しい命が芽吹いている姿をみて、生かされた者の使命を果たすため懸命に生き抜いていく。

広島平和記念資料館で黒焦げのお弁当箱やちりぢりになった服を見たことを思い出した。目の球が飛びでてしまっている黒焦げの遺体の写真もあった。どれもこれも悲惨で目を背けたいものばかりだ。歴史の授業で学んで知ったつもりでいた自分が情けなくなった。この時代に生まれていなくてよかったな、鈴子さんが麻酔なしで左足を切断するシーンで、つい心の中の本音が飛び出てしまった。もし私がこの広島にいたのならどうなっていただろう。父親は出征してそばにいなかったかもしれない。男性達が戦場へ行き、町中には残された女性、子どもが数多くいたはずだ。いつも心配症の母は父の無事を祈り続けただろうし、不安を子どもの前で出さないよう気を配っていただろう。五つ下の弟は学童疎開していたかもしれない。甘えん坊で今でも母と手を繋がないと眠れないのに両親と離れ離れで日々を過ごせるだろうか、そう想像するだけで胸がぎゅっと締め付けられる気持ちになった。一五歳になったばかりの私はどうか。人手不足で少女達が建物疎開や工場動員されていた。勉強したくてもできなかった学生が数多くいたはずだ。みなが懸命に生きていた場所に一発の原爆が投下され、一瞬で命が消え、残された人もまた原爆症への恐怖で生きた心地がしなかったはずだ。志望校への道が果てしないものに思え、不安に駆られる日々を過ごしながらか、勉強から逃れたいと弱音を吐いてばかりの自分だったことに気づいて、我に返った。反省した。

証言活動をする鈴子さんの行動力は凄まじい。沖縄や長崎訪問だけでなく、日本を飛び出し韓国、中国の地で被爆体験を話してきた。軍国少女として過ごしていた自分への戒めかもしれない。日本はアジアへ侵略戦争を犯し植民地としてきた。私たちは、あまりに知らなすぎるのではないだろうか。そして触れてはいけないことに触れているような、そんな社会の雰囲気があるような気がしてならない。調べてみると韓国や朝鮮の被爆者たちに医療費の助成がおこなわれるようになったのが二〇〇四年だとわかった。年号の引き算をせずにはいられなかった。顔や体にひどいケロイドの痕がある人々が母国でどれほどの年月を耐え、日本をどう思い、過ごしてきたか想像できるか。証言冒頭で「私たちは無知でしたと謝罪から始める鈴子さんの勇気に圧倒された。失敗を認めたり、非難を受け入れることはなかなか難しい。誰だって責任を人に擦りつけてしまった経験があるものだと思うから。

夏休みに原爆の写真展に足を運んだ。広島では目を背けたいような思いだった私も鈴子さんに勇気をもらい、一枚一枚丁寧に時間をかけて写真と向き合った。

「痛みを分かち合うこと」今までの私に足りなかったことはそれだ、そう確信した。

世界中で戦争が起こり、尊い命が一瞬で奪われた。この過去を変えることはできないが、人々の悲しみを分かち合うことができる。

私は本当に戦争が怖い。九歳の時、原爆の子の像のモデルとなった少女の折った小さな折り鶴を見て初めて、戦争は罪のない人々を絶望へと追いやる恐ろしく残酷なものを知った。紛争のニュースを見るたび胸が痛み、毎年欠かさず戦争経験者の本を読んでは、それは誰の身近にでも起きてしまうもの、始めたらなかなか終われないものと痛感した。

立場の違う者が持つ認識の違いを少しでも埋め、過去の反省を未来へ語り繋ぐことが大切。

正しい知識を見極める力も多様な意見に素直に耳を傾ける努力も必要だ。そう思ってきた。でも、それだけじゃ足りないんだ。私も人の痛みを理解できる人になりたい。鈴子さんのように相手に寄り添い、勇気を持って行動できる人でありたい。争いは絶対に繰り返してはならない。誰もが平和を願う気持ちは同じで、そこに国や民族は関係ない。私は先人たちのまいた平和の種を育てあげたい。

## 「ともに分かち合う」三年福永結月

